

交通 評論



が、山頂に滞在して観測していた研究者たちは、観測の継続の心配をした。観測用電源は雷を予想してバッテリーを準備しているが、山麓の配電盤の突発事故には備えていなかった。このように自然の中におかれた配電盤は常に野生動物との戦いである。

3月18日に福島第一原発で停電が起こり冷却水が一時停止した。配電盤に入り込んだネズミがその原因であったことが2日後に発表されたが、これを聞いてまず思い出したのが、昨年夏の富士山観測中の停電である。

昨年8月15日の夜半、富士山測候所でオキシダントやエアロゾル、宇宙線などの観測中に突然電源が落ちた。当時山頂の天気は安定していて雷もなく、配線の異常もなく原因がわからないう。そのままに朝を迎え、山麓の配電盤を点検したところ2匹のネズミが死んでおり、ショートしていたことが分かった。

結局、この事故では12時間のデータの欠損で済んだ

電線を張り巡らしたりしてイノシシ除けを行っているが被害は増える一方である。このグループには獣医学の専門家もいて、昨年未捕獲したイノシシの解剖と放射性セシウムを調べたところ、筋肉に多く、肝臓や胃など臓器も、胃の内

配電盤のネズミ

土器屋 由紀子

容量も低い値を示した。殺処分を逃れて野生化した牛についても筋肉に放射性セシウムが濃縮されること知らない。

鳥で原発の電源に入り込んだネズミは当然のことながら被ばくしていると思われる。人間が近づかない高線量のところでも野生動物は入り込む。

2011年(平成23年)3月以来、人が住めなくなった地域では、ネズミ、モグラ、イタチなどの小動物、イノシシ、猿、クマなどが増えているといわれる。電線を張り巡らしたりしてイノシシ除けを行っているが被害は増える一方である。このグループには獣医学の専門家もいて、昨年未捕獲したイノシシの解剖と放射性セシウムを調べたところ、筋肉に多く、肝臓や胃など臓器も、胃の内

私たちの世代は原発事故という最悪の負の遺産を子孫に残してしまった。その復元に向けての努力の中で、野生動物をはじめとした生態系に与えた影響をできるだけ多く正確に調査して残しておくことも義務ではないだろうか。

(江戸川大学名誉教授)